蝶ネクタイとオムレツ

高橋義孝

文化出版局

蝶ネクタイとオムレツ

高橋義孝

文化出版局

蝶ネクタイとオムレツ
定価　九八〇円
昭和五三年九月二五日　第一刷発行

著者　高橋義孝
発行者　大沼　淳
発行所　文化出版局
東京都渋谷区代々木三―二二―一
郵便番号　一五一
電話(〇三)三七〇―三一一一(代表)
振替　東京二―一九五六七〇番
印刷所　精興社／文化カラー印刷
製本所　大口製本

0095-710470-7368
© Yoshitaka Takahashi 1978

蝶ネクタイとオムレツ　目次

I　こしかた

こしかた……9

Supplément

下町生れ……61
みよし野の……65
忘れ得ぬ人々……67
東京今昔物語……70

II　食べもの飲みもの

東京の食べもの……79
異説・食べもの考……84
弥助のはなし……96
握り……100
養鶏場のにわとり……102
ある料理番組の教訓……104

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ひょい、ひらり——107
オムレツ作り——110
馬鈴薯と胡瓜——113
面々の御計なり——116
盃をめぐって——118
夜更の酒と雲——121
本日は御日柄もよろしく——123

Ⅲ　身のまわり

ネクタイ因縁物語——129
片付かない気持——133
渋さ——138
着物とわたくし——141
去りがたき「私」——147
本当の「自分」——152
名刺——156
字引きの一功用——160

美と実用の背反——162
「ぼくの外套ですが」——165
煙の行方——168
北海の魚——173
床の間異変——178
風の音——181
ぼろ家住まいの負け惜しみ——183
毛筆と漢字の生理学——186
どうでもいい——191
鬱々——193

Ⅳ　相撲とゴルフと能

秋場所千秋楽——199
相撲部屋の竹べら——201
くわい頭の社会——204
虫の知らせ——207
野辺の送り——213

変なゴルファー 216
ぐにゃぐにゃ 218
少し変な国・日本 221

V 女ごころ

女というもの 227
男性の女性論 229
お正月と日本女性 232
男性コントラ女性 234
女ごころの一筋に 237
女ごころのメカニズム 239
男女の違い 242
猫も杓子も 245
顔 247
後記 251

装幀　栃折久美子

I　こしかた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

「高橋！」

と先生から声がかかった。旧制高知高等学校第二学年の、T教授のドイツ語の時間である。

私はやおら椅子から起ち上って、テクストのドイツ文の一節を読み、それからその部分をゆっくりとした口調で日本語に訳した。訳し終って、椅子に腰を下ろすと、T教授は小さな眼を大きく見開いて、口を少し開けて、何も言わずに私の顔をじっと見詰めている。先生、大いに驚いたのである。

と言うのも、私はドイツ語が苦手中の苦手で、一年生の時のドイツ語の成績は「赤丸」、つまり落第点であった。T教授はむろんそれを知っている。ところが、そういうドイツ語の劣等生が、何とテクストのドイツ文を、多少間っかえつっかえしながらも、ものの見事に訳しおおせたからである。誤訳は一つもない。のみならず訳文そのものもよくこなれた日本文になっていたはずである。

自分から、誤訳は一つもないだの、よくこなれた日本文になっていたはずだのと言うのは

可笑しな話なのであるが、実は教科書の頁の間には、そのテクストの訳文がはさんであった。同じテクストが東京のドイツ語講習会で使われて、その講習会に出ていた先輩が講師の訳を忠実に書きとめて、それをかねて私のところへ送ってよこしていた。私はその訳文を間っかえつっかえしながら読み上げたのであった。なぜ間っかえつっかえしながら読んだのかというと、すらすらと読んでしまっては却って先生に怪しまれはしないかと思ったからである。

そういう訳だから、先生がびっくりしたのもむりはない。そしてこの一件は先生に強烈な印象を与え、先生は高橋という生徒はドイツ語が非常によく出来ると確信するに至ったらしい。

ところで往生したのはこっちである。なぜかというと、それ以後というもの、何かと言えば先生から「高橋！」「高橋！」とお声がかかる。全く生きた心地がしない。それまではドイツ語の予習などろくにしなかったのに、それ以後はいやでも予習をして置かなければならなくなった。どうも飛んだことになってしまった。

こういうひょんなことから私は自然とドイツ語がよく出来るようになった。自分から好きを好んでドイツ語の勉強をしたわけではないのである。

しかし今から当時を振り返ってみると、私が興味を持ったのは、ドイツ語そのものに対してではなくて、実は日本語に対してなのであった。T教授の日本語訳は、多少古風ではあったが、一種の名文であった。一種の格調があった。そして私はT教授の日本語訳によって、それ

まで知らなかった日本語の新しい語彙と表現とを知るようになった。翻訳の要は、訳者がどれほどその外国語に通じているかという点にあるよりも、その訳者がどれほど日本語を知っているかという点にあるということをT教授は言わず語らずのうちに私たちに教えてくれたのである。

教室のT教授は自分の訳文に酔ったように、声を張り上げてドイツ文を訳して行った。しかしある時、クラス中の誰彼がT教授のズボンのMボタンが全部はずれているのを発見した。生徒のひとりが起って、教授の前に進み出て、T教授にそのことを鄭重に知らせた。その時のT教授の狼狽ぶりはいまだに私の記憶に鮮明に残っている。

二

何十年もの間、全く忘れ去っていて、ある日ふと思い出すというような小事件がある。ここに書くことも、そういう小事件の一つである。

道に面した丸窓の障子にパラパラと何かが当る物音で眼を醒ました。私は十九歳で、この第三学期でいよいよ高等学校を卒業する。二月の半ば頃だったであろうか。下宿の一室は二階に

あって、階下に一間、二階が一間の別棟の離れである。下の部屋はもう床がぬけそうになっていて、人は住めない。

眠い眼をこすりこすり、丸窓の横の障子をあけて下の通りを見ると、夜明けに近い闇の中に小柄な女が一人立っている。T楼の若い芸者——ここでその芸者の源氏名を書くのが定石なのだが、それをもう憶えていない。仕方がないから花子とでもして置こうか。しかし一目でそれと解った。花子は私を起そうとして、小石を拾って二階の障子に投げたのである。

未明の訪客、母屋の人たちに気取られないように二階へ招じ入れた。(花子がどうして私の下宿を知っていたのか、それが今では解らない。それまでに私の下宿を訪れたことは一度もなかったということだけははっきりしている。)

「みんなで七ッ淵へお参りに行った帰りなの。眠くてねむくて仕様がないから、少し寝かせて頂戴」

むろん土佐弁でこう言うのである。T楼は立派な大きな料亭で、芸者たちは広いT楼の中の置き屋に寝起きしていた。毎年の仕きたりで芸妓仲居が総出で、市の郊外にある七ッ淵の神社へ真夜中にお参りに行ったのである。

花子はさらりと着物を脱ぎ棄てて、長襦袢一つになって私の寝床にもぐり込んだ。私はといえば、それより早く蒲団から出て寝間着を学生服、学校の制服に着換えていた。花子は蒲団に

入るなり眼を閉じた。頬と額に少し面皰(にきび)がある。私は花子の寝ている蒲団の横に正座して、所在なさに煙草を吹かしながら、花子の寝顔を見ていた。

次第に外が明るんでくる。小一時間ほどして、花子が眼を醒まして、

「さあ、もう帰らなくては」

と言って私の顔をじっと見た。

蒲団から抜け出して、足袋を穿く、着物を着る、帯を締める。私は無言でその有様をただ眺めている。

「それじゃ、どうもお邪魔さまでした。またお店の方へ来て頂戴」

こう言って、梯子(はしご)段を忍び足で降りて行く。私はそのあとについて、門のところまで花子を送って出た。夜はすっかり明け放れていた。南の国とはいえ、二月半ばの夜明けは寒かった。花子は「手ぶらで」帰って行った。

それだけの話である。しかし今にして思うと、何だか間の抜けた、少し滑稽な、どうも気の利かない話である。私は花子が好きでも嫌いでもなかった。その花子が未明に私を訪れて、私の蒲団の中に小一時間ほど身を横たえたのである。花子の魂胆は私に解りすぎるほど解っていたはずである。それに私はすでに女のことは少しばかり心得ていた。その私が花子の寝ている蒲団の横にきちんと坐って、ただ煙草を吹かしていたのである。

長年の間、私はこの一件をすっかり忘れていた。そして近年、ふとこれを思い出して、我ながら妙な気持がした。気の毒に、夜具がさぞ男臭かったことであろう。

三

離れの二階の部屋で私はもう一つ珍事を経験した。尤も果してこれを「珍事」と呼んでいいかどうか、これは多少疑問であるが、私にとっては初の経験であった。

「そんなことを言うなら、どうなりとお好きなようになさって下さい」

こう言って娘さんは大きな丸いお尻を私の方へ向けて、畳に突っ伏した。柔かい絹の着物で、袖は普通の寸法よりかなり長い。町の裕福な老舗の一人娘で、私がいる下宿の同じく一人娘の女学校友だちだった。初めは下宿の娘さんと一緒に私の部屋へ遊びに来ていたが、そのうち一人でこっそりやってくるようになった。

さてその大きな丸いお尻には西陽が当っていた。それがいかにも奇妙に思われた。好きなようにしてくれと言われても、私には「ああ、さいですか、では」と言って何らかの行動に出る才覚がなかった。そこで例の如く煙草を吹かしながら、「赤い夕陽に照され」た大きな丸いお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com